

教えてもらった話

～私たちが大切なことだと感じたこと～

VOL 8

ご自由にお持ち帰りください。



安心・快適そしてワクワク

株式会社 くるま生活

《 神様がくれた耳 》

アメリカの学校で理科の授業中、実験に使っていたマウスが逃げ、どこに隠れたのかわからなくなった。女性の教師はみんなに探させたが、見つからない。そこで全員を席に着かせ、自信たっぷりにこう言った。「これだけ探して発見できないのなら、あとは、モリス君にお願いしましょう」途端に、ちょっと待って何でアイツが、という声があちこちから起こった。

教室はざわめき、一人が、「モリスには無理です」と手を挙げて言った。実はモリスは目が不自由なのである。教師は答えた。「なるほど、確かに目が不自由です。だからモリス君には無理だと、みんなは思うかもしれませんが。でも、先生は知っています。モリス君は目が不自由でも、神様から素晴らしい能力をもらっています。聴力です。それを生かせば必ず、マウスを見つけてくれると、先生は信じています。モリス君、お願いできますか？」そして、モリスは期待に応じて捜し出した。

そして、日記にはこう書き残した。「あの日、あのとき、僕は生まれ変わった。先生は僕の耳を神様がくれた耳と言って、褒めてくれた。僕はそれまで目が不自由なことを、心の中で重

荷に感じていた。でも先生が褒めてくれたことで、僕には大きな自信がついた」

このマウス事件から十数年。神の耳を生かして音楽の道に進んだ、スティービー・モリスは、シンガー・ソングライターとして、鮮烈なデビューを果たす。スティービー・ワンダーという名前で！

【ご飯、作ってもらっていないみたい・・・】

この子、朝ご飯も食べていないし、どうも、お母さんにご飯を作ってもらっていないみたいなんです。学童保育の先生から相談がありました。

食育指導士の私の知人は、すぐにお母さんに会いに行きました。お母さんは、茶色の巻き髪を指でくるくるもて遊びながら「まじ、やばいんですよねえ～。」

知人

「お母さん、すごいねえ～、やばいって気付けているって、すごいよお～。」

お母さん

「?!」

知人

「やばいって気付いているんだから、一緒に出来ることを探そお〜。」

お母さんは夜遅くまで仕事をしています。いつも、テーブルの上に500円玉を1つおいて出掛けるのだそうです。子どもは、その500円で、コンビニ弁当やハンバーガーを買って食べていました。

「お母さん、この500円で、お母さんがお弁当を買ってきてあげよう。」

「えっ、そんなんでいいんですか？」

「いいよお。」

お母さんがお弁当を買ってテーブルの上に置いておくようになると、子どもは、そのお弁当を一人で食べないで、お母さんを待つようになりました。

「じゃあ、今度は、割り箸ではなくて、この子のお箸を付けてあげよう。」

子どもは、そのお箸で、とても嬉しそうにお弁当を食べました。

それを見たお母さん、休みの日にハンバーグを作りました♡

人は変われます。出来ることを少しずつ実践すればいいのです。私は、この話を聞いて、支援とは、無理なことを強制することではなく、相手に寄り添い、出来ることを一緒に探すことだと思いました。

～伊藤のりえさまの投稿より～

お釈迦様と悪口男のお話

あるところに、お釈迦様が多くの人たちから尊敬される姿を見て、ひがんでいる男がいました。

「どうして、あんな男がみんなの尊敬を集めるのだ。いまましい」

男はそう言いながら、お釈迦様をギャフンと言わせるための作戦を練っていました。

ある日、その男は、お釈迦様が毎日、同じ道のりを散歩に出かけていることを知りました。そこで、男は散歩のルートで待ち伏せして、群集の中で口汚くお釈迦さまをののしってやることにしました。

「お釈迦の野郎、きつと、おれに悪口を言われたら、汚い言葉で言い返してくるだろう。その様子を人々が見たら、あいつの人気なんて、アッという間に崩れるに違いない」

そして、その日が来ました。男は、お釈迦さまの前に立ちはだかって、ひどい言葉を投げかけます。お釈迦さまは、ただ黙って、その男の言葉を聞いておられました。弟子たちはくやしい気持ちで、「あんなひどいことを言わせておいていいのですか？」とお釈迦さまにたずねました。それでも、お釈迦さまは一言も言い返すことなく、黙ってその男の悪態を聞いていました。

男は、一方的に お釈迦さまの悪口を言い続けて疲れたのか、しばらく後、その場にへたりこんでしまいました。どんな悪口を言っても、お釈迦さまは一言も言い返さないのです、なんだか虚しくなってしまったのです。

その様子を見て、お釈迦さまは、静かにその男にたずねました。

「もし他人に贈り物をしようとして、その相手が受け取らなかった時、その贈り物は一体誰のものだろうか」 こう聞かれた男

は、突っぱねるように言いました。

「そりゃ、言うまでもない。相手が受け取らなかったら贈ろうとした者のものだろう。わかりきったことを聞くな」男はそう答えてからすぐに、「あっ」と気づきました。お釈迦さまは静かにこう続けられました。

「そうだよ。今、あなたは私のことをひどくののしった。でも、私はその ののしりを少しも受け取らなかった。だから、あなたが言ったことはすべて、あなたが受け取ることになるんだよ」人の口は恐ろしく無責任なものです。ウワサとか陰口というのは、事実と違って、ずいぶんとでたらめなことがよくあります。ウワサや陰口ではありません。図太い神経の持ち主で、目の前にいる相手に向かって、直接ひどいことを言う人もいます。「それ、私の上司です」と苦笑いしたくなる人も いるかもしれません。自分を非難されるようなことを言われたら、たいていの人が、ダメージを受けます。傷ついて落ち込んでしまったり、腹が立ってイライラしたりすることも、あるでしょう。でも、お釈迦さまは、違いました。人前で恥をかかされることを言われても、ちっとも動じません。その場を立ち去ることも

せず、じっと相手の話を聞いているのに、口応えもしません。それでいて、まったく傷ついたり怒ったりしないのです。お釈迦さまは、相手の言葉を耳に入れても、心までは入れず、鏡のように跳ね返しました。ですから、まったくダメージを受けないのです。言葉は時として、人の心を傷つけることのできるナイフになります。しかし、心がナイフより固くて強ければ、痛くもかゆくもないのです。ひどいことを言う相手を責めても、仕方ありません。それより、自分の心を強くする方が、簡単で効果的です。

引用文：変わりたいあなたへの33のものがたり

「コーヒー五つ下さい。三つは”保留”で」・・・保留!?

ある日私と友人は、小さなコーヒーハウスに入り、それぞれコーヒーを注文した。テーブルにつこうとすると、二人の客がカウンターに向かい「コーヒー五つ。三つは”保留”で」と言っ

てコーヒー五杯分の支払いを済ませていた。「コーヒーの保留って？まあちょっと見てようか」二人の女の子が、それぞれ一杯分のコーヒーを買っていった。次に三人

の弁護士が、七杯のコーヒーを注文し四杯を”保留”にしていた。

暖かい日差しの中、私はカフェの前にある広場の眺めを楽しみながら、コーヒーの”保留”について思いを巡らせていた。すると突然、みすばらしい服を着た物乞いの男が、カフェのドアを抜け、店員に丁寧にかう聞いた。

「すみませんが”保留”のコーヒーはありますか？」

それはとてもシンプルな答えだった。人々は、暖かい飲み物を買う余裕のない、誰かのために”先払い”をしていたのだ。この風習はナポリで始まり世界中に広まっていった。

今ではコーヒーだけでなく、サンドイッチやパンも”保留”できる場所が現れるようになったという。

18歳の回天特攻隊員の遺書

お母さん、私は、後 3 時間で祖国のために散っていきます。胸は日本晴れ。 本当ですよお母さん。少しも怖くない。

しかしね、時間があつたので考えてみましたら、少し寂しくなってきました。

それは、今日私が戦死した通知が届く。お父さんは男だからわかっていただけだと思います。が、お母さん。お母さんは女だから、優しいから涙が出るのでありませんか。弟や妹たちも兄ちゃんが死んだとって寂しく思うでしょうね。

お母さん。

こんなことを考えてみましたら私も人の子。やはり寂しい。

しかしお母さん。考えてみてください。

今日私が特攻隊で行かなければどうなると思いますか。戦争はこの日本本土まで迫ってこの世の中で一番好きだった母さんが死なれるから私が行くのですよ。

母さん。今日私が特攻隊で行かなければ年をとられたお父さんまで銃をとるようになりますよ。だからね。お母さん。

今日私が戦死したからとってどうか涙だけは耐えてくださいね。でもやっぱりだめだろうな。お母さんは優しい人だったから。

お母さん 私はどんな敵だって怖くはありません。私が一番怖いのは、母さんの涙です。

忘れてはいけません…

出典元：涙が止まらない

『いのちをいただく』ということ

その絵本の帯に、一人の名も無い主婦のメッセージが書かれていた。「朗読を聴いて、うちのムスメが食事を残さなくなりました。」絵本に食肉加工センターの「坂本さん」という人が登場する。実在の人物である。

坂本さんの職場では、毎日毎日たくさんの牛が殺され、その肉が市場に卸されている。牛を殺すとき、牛と目が合う。そのたびに坂本さんは「いつかこの仕事をやめよう」と思っていた。

ある日の夕方、牛を荷台に乗せた一台のトラックがやってきた。「明日の牛か…」と坂本さんは思った。しかし、いつまで経っても荷台から牛が降りてこない。不思議に思って覗いてみると 10 歳くらいの女の子が、牛のお腹をさすりながら何か話し掛けている。その声が聞こえてきた。

「みいちゃん、ごめんねえ。みいちゃん、ごめんねえ……」
坂本さんは思った（見なきゃよかった）

女の子のおじいちゃんが、坂本さんに頭を下げた。「みいちゃんは、この子と一緒に育てました。だけん、ずっとうちに置い

とくつもりでした。ばってん、みいちゃんば売らんとお正月が来んとです。明日はよろしくお願いします…」

(もうできん。もうこの仕事はやめよう)

と思った坂本さん、明日の仕事を休むことにした。

家に帰ってからそのことを、小学生の息子のしのぶ君に話した。しのぶ君はじっと聞いていた。一緒にお風呂に入ったときしのぶ君は父親に言った。

「やっぱりお父さんがしてやってよ。心の無か人がしたら牛が苦しむけん」しかし、坂本さんは休むと決めていた。

翌日、学校に行く前にしのぶ君はもう一度言った。

「お父さん、今日は行かなんよ！（行かないといけないよ）」

坂本さんの心が揺れた。そしてしぶしぶ仕事場へと車を走らせた。牛舎に入った。坂本さんを見ると、他の牛と同じようにみいちゃんも、角を下げて威嚇するポーズをとった。

「みいちゃん、ごめんよう。みいちゃんが肉にならんとみんなが困るけん。ごめんよう」と言うと、みいちゃんは、坂本さんに首をこすり付けてきた。

殺すとき動いて急所をはずすと牛は苦しむ。坂本さんが「じ

っとしとけよ。じっとしとけよ」と言うと、みいちゃんは動かなくなった。

次の瞬間、みいちゃん目から、大きな涙がこぼれ落ちた。牛の涙を坂本さんは初めて見た。

出典元：『いのちをいただく』西日本新聞社

レイモンド・A・スプルーアンス海軍大将の言葉

「アメリカの青年達よ。東洋には、すばらしい国がある。それは日本だ。日本には君達が想像もつかない立派な青年がいる。ああいう青年がいたらやがて日本は世界の盟主になるに違いない。奮起しろ！」

硫黄島での戦いの時に、第五艦隊司令長官としてアメリカ海軍を指揮した レイモンド・A・スプルーアンス海軍大将の言葉です。彼は戦後、この言葉を伝えるべく全米各地を公演して回りました。彼が、このように日本の事を言うようになったのは次のようなエピソードがあったからです。

1ヶ月近く激戦を繰り広げ、多大な犠牲者を出して、アメリカ軍が硫黄島を占領した。あくる日のことです。岩山の穴の中

から負傷した日本の陸軍少佐が、降伏のしるしのハンカチをもって出てきた。彼は「司令官はいないか。穴の中には有能な30名の青年達が残っている。彼らを日本のため世界のために生かしてやりたい。私を殺して彼らを助けてくれ。」といいました。少佐を引見したスプルーアンスが「お前も部下達も助けてやろう」というと、彼は「サンキュー」といって絶命しました。

その後、アメリカ軍は、青年達が残っている穴の中に、煙草や缶詰を投げ入れたりして、残された青年達に穴から、出てくるよう勧告をしますが、彼らはそれに応じず抵抗を続けました。

数ヶ月間の抵抗の末、やがて何名かが餓死し、最後に残された者たちは、手榴弾で自決して果てました。その爆発がした時に、スプルーアンス司令官が、の所に飛んで行くと、穴の入り口に英語と日本語で書かれた手紙がおかれていました。

「閣下の私達に対する御親切な御厚意、誠に感謝感激に堪えません。閣下より戴きました煙草も肉の缶詰も、皆で有り難く頂戴いたしました。お勧めによる降伏の儀は、日本武士道の習いとして、応ずることができません。最早（もはや）水もなく食もなければ、十三日午前四時を期して、全員自決して天国に

参ります。終りに貴軍の武運長久を祈って筆を止めます。」

昭和二十年五月十三日 日本陸軍中尉 浅田真二

米軍司令官スプルーアンス大将殿

旧日本兵 2 万 2000 人が戦死。今だに 1 万 3000 人あまりの遺骨がみつかっていない。

— 祖国と青年 平成 7 年 6 月号 —

引用先：木漏れ日 Cafe

最後までお読みいただきまして

ありがとうございました。

ホンの少しですが、この冊子を手にとられたすべての人が心豊かになることを祈念しております。

株式会社くるま生活は幸福創造企業です。

私たちは人が幸福になるために必要な事は二つあると考えています。

①人に存在を認められる事

②素敵な想いが実現すること事

私たちとご縁がある方は勿論のこと、ご縁の無い方も幸福になるように
仕事させていただきます。(*^^)v

〒720-0961

広島県福山市明神町2丁目9-25

株式会社くるま生活

代表取締役社長 井上康一

TEL 084-943-7123

info@kurumaseikatsu.co.jp

第8回作成 2014年9月2日

コピー大歓迎。何部でもお届けします。